

2007年10月

「子どもの生活に関するアンケート調査」より 『学校教育に対する親の認識と子どもの関心』 ～学校教育での学習に対して「非常に満足している」親はごく僅か～

第一生命保険相互会社（社長 斎藤 勝利）のシンクタンク、（株）第一生命経済研究所（社長 小山 正之）では、全国の中学3年生までの子どもをもつ父親・母親とその子どもを対象に、標記についてのアンケート調査を実施いたしました。

この程、その調査結果がまとまりましたのでご報告いたします。

《調査結果のポイント》

教育の充足感(P2～3)

- 受験科目、専科科目、生活に関する教育や指導いずれについても、半数以上の母親は「十分」ととらえている。

学習環境の評価(P4)

- 授業の難易度について、父親の4割弱が「わからない」と回答。授業の工夫にいたっては、過半数が「わからない」と回答。

成績の把握状況(P5)

- 母親の9割以上が、子どもの成績を把握している。
- 特に中学生の母親では、5割弱が子どもの成績をよく把握している。

学校教育における子どもの学習状況に対する満足度(P6)

- 学校教育での学習に対する親の満足度は、学年が高くなるほど低下する。「非常に満足している」と回答した人はごく僅か。

勉強時間の長さを左右するもの(P7)

- 父親・母親が子どもに勉強を教えることが多い家庭ほど、子どもの勉強時間は長い。

子どもの関心領域(P8～10)

- 7割以上の子どもが世の中のことやニュースなど、社会的関心を持っている。
- 8割以上の子どもが「新しいことをもっとべんきょうしたい」と回答。
- 5割弱の子どもが「職業教育」と「情報教育」に「とてもきょうみがある」と回答。

非教科教育に対する親の考え(P11)

- 学校で教えるべき非教科教育は「多様性教育」が上位。家庭では「食育」。

＜お問い合わせ先＞

(株)第一生命経済研究所 ライフデザイン研究本部
 研究開発室 広報担当 (室井・新井)
 TEL. 03-5221-4771
 FAX. 03-3212-4470

【アドレス】<http://group.dai-ichi-life.co.jp/dlri/ldi>

☆本冊子は、当研究所が行った「子どもの生活に関するアンケート調査」をもとに作成したものです。アンケート調査に関するお問い合わせは、左記の広報担当、またはホームページにて承ります。

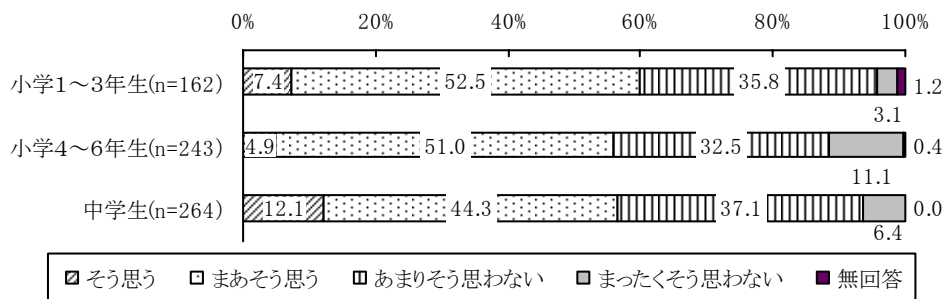
《アンケート調査の実施概要》

- | | |
|-------------|--|
| 1. 調査地域と対象 | 全国の中学3年生までの子どもをもつ父親・母親およびその子どものうち小学4年生～中学3年生までの子
※該当子が複数いる場合は最年長子のみ |
| 2. サンプル数 | 父親・母親 1,078組
子ども 567名 |
| 3. 有効回収数(率) | 父親 927名 (86.0%)
母親 930名 (86.3%)
子ども 548名 (96.6%) |
| 4. サンプル抽出方法 | 第一生命経済研究所生活調査モニター |
| 5. 調査方法 | 質問紙郵送調査法 |
| 6. 実施時期 | 2007年3月 |

教育の充足感

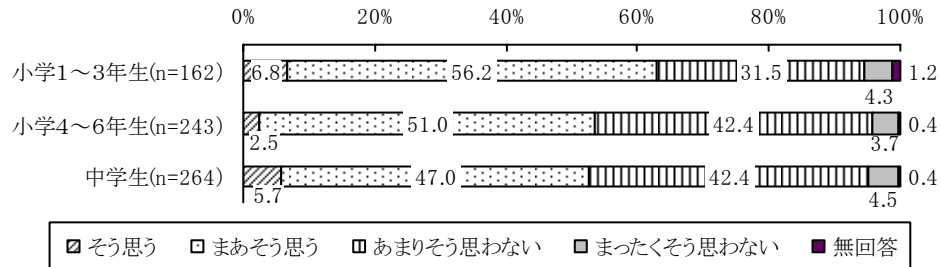
受験科目、専科科目、生活に関する教育や指導のいずれについても、
半数以上の母親は「十分」ととらえている。

図表1-1 学校での教育が「十分になされている」と思うか(就学状況別)
—国算理社などの科目(いわゆる「受験科目」)について—



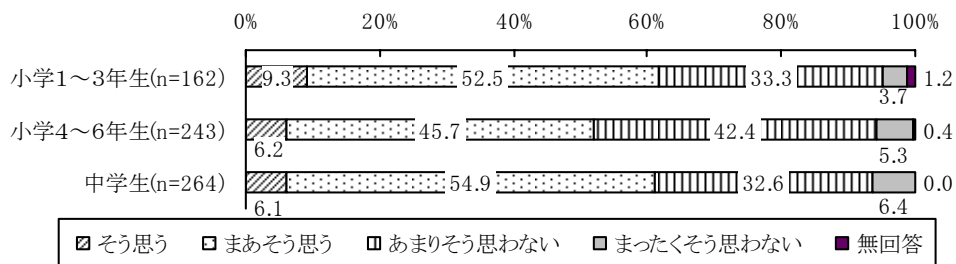
注：小学1年～中学生の子どもを持つ母親の回答結果

図表1-2 学校での教育が「十分になされている」と思うか(就学状況別)
—音楽や美術、技術家庭科などの専科科目について—



注：小学1年～中学生の子どもを持つ母親の回答結果

図表1-3 学校での教育が「十分になされている」と思うか(就学状況別)
—人とのつきあい方やあいさつ、生活態度、倫理観などの、
勉強以外の生活に関する教育や指導について—



注：小学1年～中学生の子どもを持つ母親の回答結果

小中学生の子どもを持つ母親に対し、国算理社などの科目（いわゆる「受験科目」）、音楽や美術、技術家庭科などの専科科目、人とのつきあい方やあいさつ、生活態度、倫理観などの、勉強以外の生活に関する教育や指導について「十分になされている」と考えるかどうかを就学状況別（小学1～3年生、小学4～6年生、中学生の3区分）にたずねました（図表1-1～1-3）。

その結果、受験科目、専科科目、生活に関する教育や指導のいずれについても「まあそう思う」が最も多く、「そう思う」を合わせると半数以上の母親は「十分」ととらえていることがわかりました。

それぞれについてみると、受験科目については小学4～6年生の子どもを持つ母親において、「まったくそう思わない」（学校での教育が十分になされていると思わない）とする割合が高くなっていました。

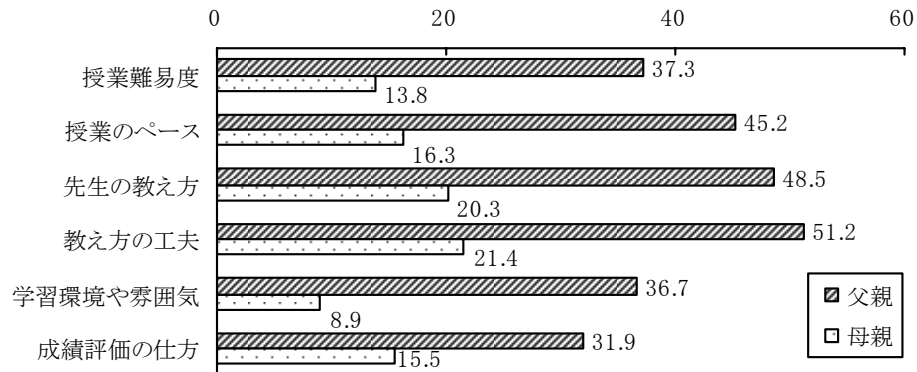
専科科目については、学年が上がるほど「そう思わない」（「あまりそう思わない」＋「まったくそう思わない」）の割合が高くなっていきます。

また、生活に関する教育や指導についても、小学4～6年生の子どもを持つ母親において「まったくそう思わない」とする割合が高くなっていました。

学習環境の評価

授業の難易度について、父親の4割弱が「わからない」と回答。
授業の工夫にいたっては、過半数が「わからない」と回答。

図表2 学習環境の評価における「わからない」の回答(父母別)



注：小学1年～中学生の子どもを持つ父親・母親の回答結果

小中学生の子どもを持つ父親と母親に対して、学校教育の評価に関してたずねました。授業の難易度について「わからない」と回答した母親が13.8%であったのに対し、父親は37.3%が「わからない」と回答しました。

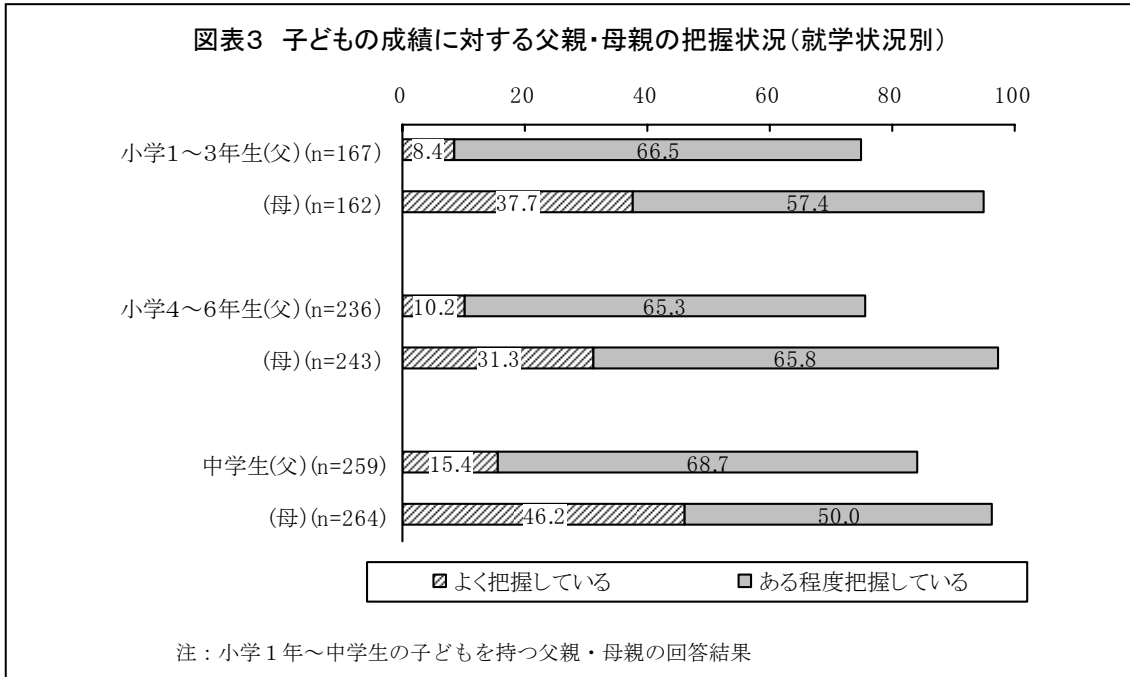
全体を通じて、母親に比べて父親は「わからない」という回答が非常に多く、子どもの学校の様子をイメージできていない実態が明らかになりました。

ただし、母親においても子どもの学年が上がるにつれて、「わからない」の割合が高くなる項目が多くなります(図表省略)。

子どもの成長とともに子どもの学校での状況がよくわからなくなり、わからないだけに親の学校への評価が低下するという構図になっているようです。

成績の把握状況

母親の9割以上が、子ども成績を把握している。
特に中学生の母親では、5割弱が子どもの成績をよく把握している。



小中学生の子どもを持つ父親・母親による子どもの成績の把握状況について、就学状況別にみてみました。

その結果、「よく把握している」と回答したのはいずれも母親で多く、特に中学生の母親で「よく把握している」と回答した人は46.2%となり、高い割合を示しました。

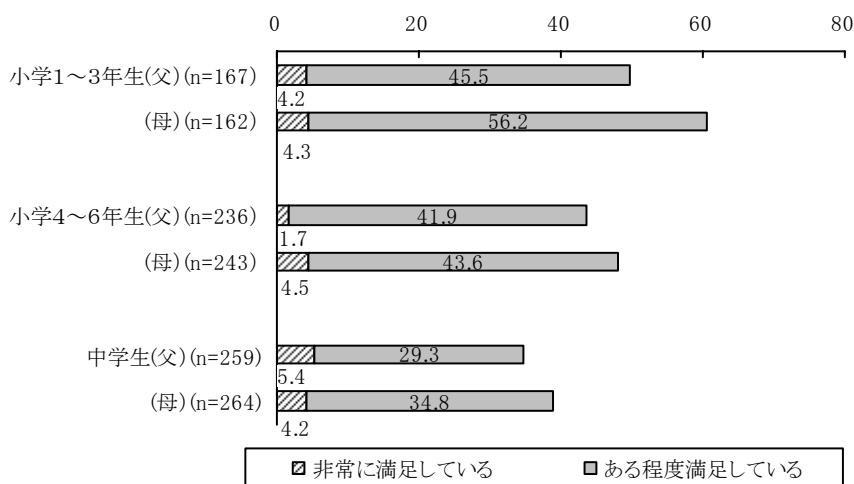
これに対して、父親では「ある程度把握している」の割合は高いものの「よく把握している」と回答した人は母親に比べると非常に少なくなっていました。

父親に比べて母親の方が圧倒的に子どもの成績を把握している実態が明らかとなりました。それでも、学年が上がるにつれて父親においても「よく把握している」とする割合は高くなっており、高校受験に向けて父親の成績の把握度合いも高まっている様子がうかがえました。

学校教育における子どもの学習状況に対する満足度

学校教育での学習に対する親の満足度は、学年が高くなるほど低下する。
「非常に満足している」のはごく僅か。

図表4 学校教育での学習に対する父親・母親の満足度(就学状況別)



注：小学1年～中学生の子どもの持つ父親・母親の回答結果

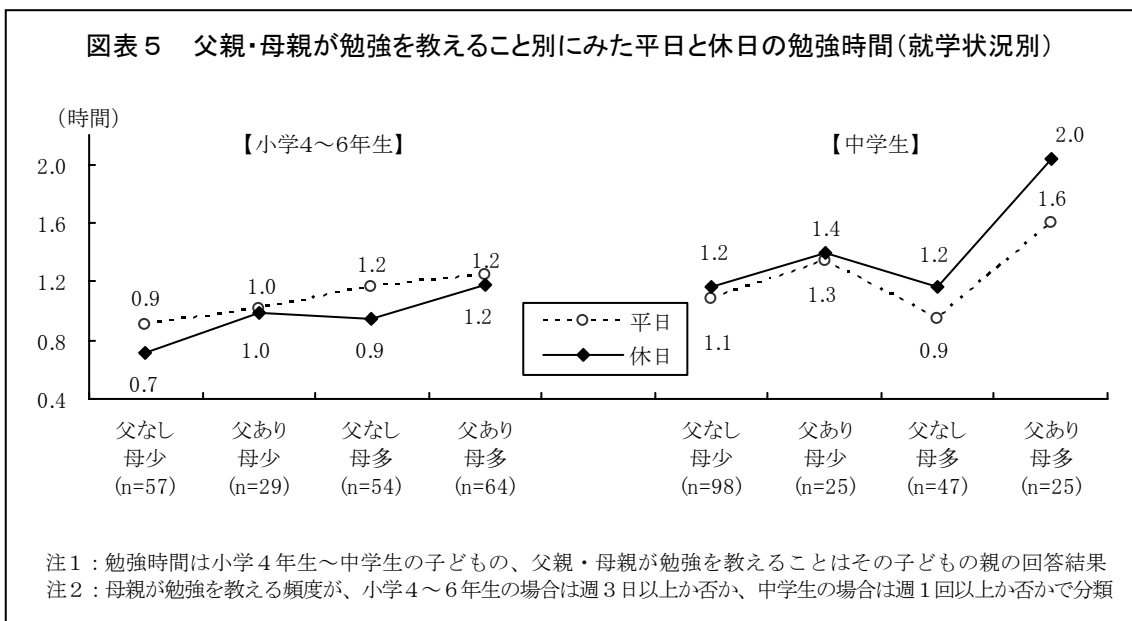
父親と母親に対し、「そのお子様の学校教育における『学習状況（成績や習熟度）』に満足されていますか」との設問で、学校教育での子どもの学習状況についての満足度をたずねました。

その結果、「ある程度満足している」という回答が最も多く、「非常に満足している」との回答はいずれの学年でも数パーセントに過ぎませんでした。

「非常に満足している」と「ある程度満足している」の合計をみると、全体的には父親より母親の満足度の方が高くなっていますが、父親・母親ともに小学校低学年→小学校高学年→中学生となるにしたがって、満足度が低くなっていることが明らかになりました。

勉強時間の長さを左右するもの -親が勉強を教える頻度-

父親・母親が子どもに勉強を教えることが多い家庭ほど、
子どもの勉強時間は長く、
「勉強は楽しい」と答えている子どもの割合は高い。



父親・母親が勉強を教える頻度と子どもの勉強時間の長さの関係を分析しました。

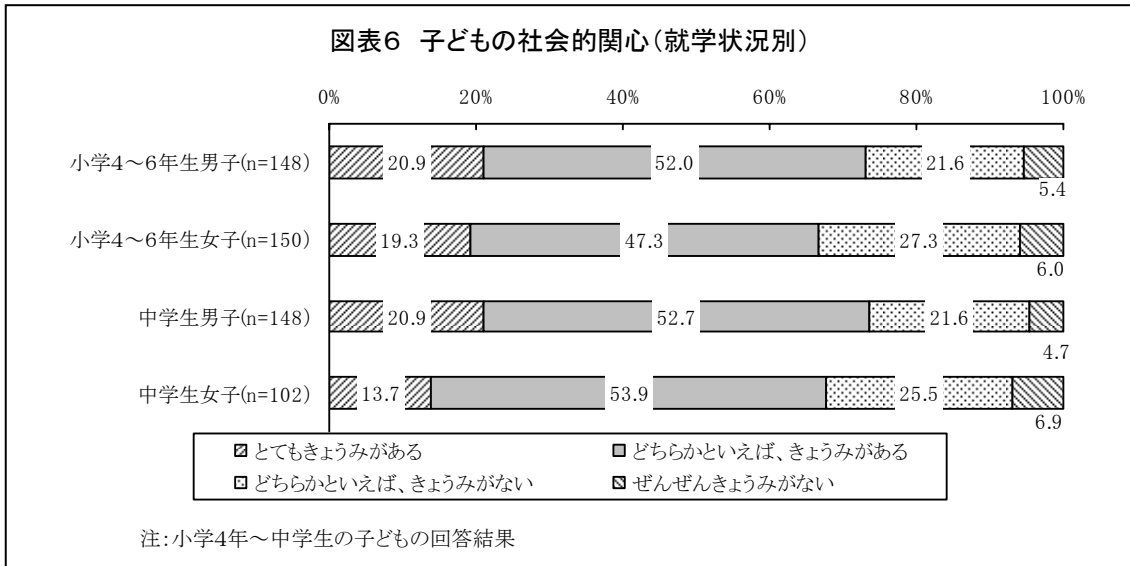
小学4～6年生の場合、(勉強を教えることが)「父なし・母少」グループの子どもの勉強時間は、平日が0.9時間、休日が0.7時間と短いのに対して、「父あり・母多」グループの子どものはそれぞれ1.2時間、1.2時間と長いことがわかりました。中学生の場合も、「父あり・母多」グループの子どものは、それ以外のグループの子どもよりも、平日、休日とも勉強時間が長くなっています。すなわち、父親・母親が子どもに勉強を教えることが多い家庭ほど、子どもの勉強時間は長いといえます。

父親が勉強を教えることの有無と母親が教える頻度の影響を比べると、父親の影響の方が強くなっています。勉強を教える頻度は、母親よりも父親の方が少なくなっていますが、父親が教えているか否かで、特に中学生は子どもの勉強時間には大きな差が生じています。

ここで、父親・母親が勉強を教えている家庭は、子どもに勉強を無理強いするために、勉強時間が長くなっているのではないかという点が懸念されます。しかしながら、父親・母親が教えることが多い家庭ほど、子どもが「勉強は楽しい」と答えている割合はむしろ高くなっており(図表省略)、先の懸念はあたりません。

子どもの関心領域－社会的関心－

7割以上の子どもが世の中のことやニュースなど、社会的関心を持っている。
全体的にみて女子より男子で社会的関心がより高い。



昨今、多様性教育や食育など非教科教育への関心が高まる中、子どもたち自身（小学4年生から中学生）がどのように考えているのか、社会的関心や学習意欲、非教科教育への関心をたずねました。

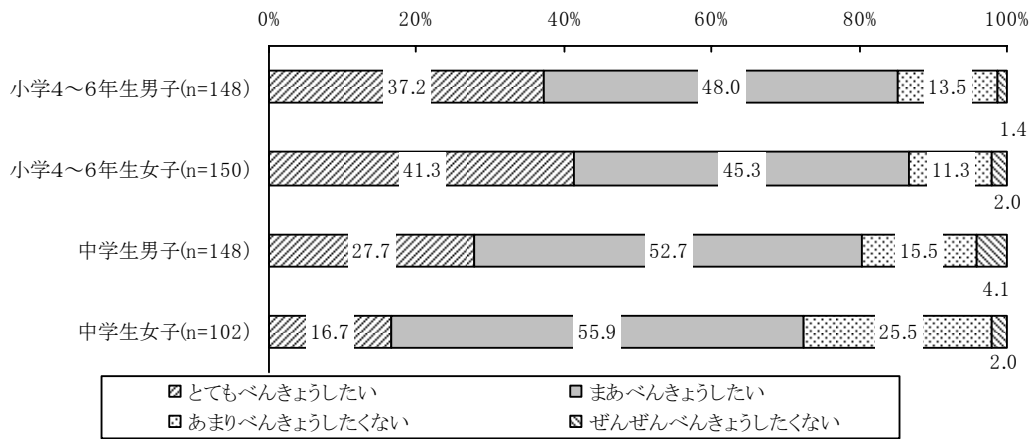
「あなたは、世の中のことやニュースについてきょうみがありますか」との設問で社会的関心についてたずねたところ、全体では7割以上が「きょうみがある」（「とてもきょうみがある」と「どちらかといえばきょうみがある」の合計）と回答しました。

ただし、「とてもきょうみがある」は中学生の女子でやや低い点や、「きょうみがない」（「ぜんぜんきょうみがない」と「どちらかといえばきょうみがない」の合計）の割合が小学4～6年生、中学生ともに男子より女子で多いなど、全体的にみて女子より男子で社会的関心がより高いという結果となりました。

子どもの関心領域－新しいこと－

8割以上の子どもが「新しいことをもっとべんきょうしたい」と回答。

図表7 新しいことに対する子どもの学習意欲(就学状況別)



注:小学4年～中学生の子どもの回答結果

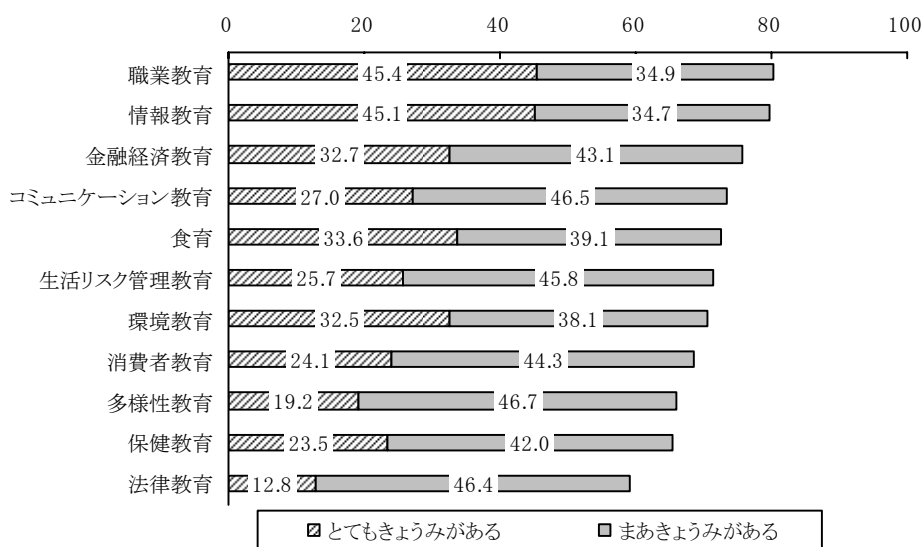
次に「新しいことをもっとべんきょうしたいと思いますか」という問いに対しては、全体的には8割以上が「べんきょうしたい」（「とてもべんきょうしたい」と「まあべんきょうしたい」の合計）と考えていることがわかりました。

これについては、中学生よりも小学4～6年生で「べんきょうしたい」という回答が多く、中学生の女子で最も「べんきょうしたい」が少ないという結果になりました。

子どもの関心領域－非教科教育－

5割弱の子どもが「職業教育」と「情報教育」に「とてもきょうみがある」と回答。

図表 8 非教科教育への子どもの関心度



注: 小学4年～中学生の子どもの回答結果

最後に、非教科教育について、以下の 11 の科目をあげ、関心をたずねました。

その結果、「きょうみがある」（「とてもきょうみがある」と「まあきょうみがある」の合計、以下同じ）との回答を得たのは、上位から「職業教育」「情報教育」「金融経済教育」となりました。特に「職業教育」と「情報教育」については「とてもきょうみがある」の占める割合がいずれも 45%以上と高くなりました。

一方、「きょうみがある」とされた割合が低かったのは、下位から「法律教育」「保健教育」「多様性教育」となっています。

(参考) アンケートでのワーディング

	父親・母親用調査票	子ども用調査票
法律教育	法律教育:身近な法律や規則、トラブル対処のノウハウ	社会のきまりやルール、法律
金融経済教育	金融経済教育:預貯金、投資、資産運用など	お金の使い方、貯金、お金の管理、運用
消費者教育	消費者教育:購買、消費、悪徳商法など	ものを買ったり売ったりすることのしくみやきまり
生活リスク管理教育	生活リスク管理教育:災害、事故、保険など	地震や火事、事故やケガのときの行動のしかた
情報教育	情報教育:IT、インターネットやパソコン・携帯電話の使い方やルール、危険性など	パソコンやケータイ、インターネットの使いかたやいい点・わるい点
コミュニケーション教育	コミュニケーション教育:人とのつきあい方、いじめ問題	人とのつきあいかた、礼儀、いじめもんだい
食育	食育:食を食べることと生きること、飽食と飢餓、料理、食の安全など	食育、食を食べることや食事を作ること（たとえば、体によい食べ物・悪い食べ物など）
保健教育	保健教育:生と死、病気、性、出産、子育てなど	病気、出産、生きることや死ぬこと、いのちのこと
職業教育	職業教育:職種や業種について、職業選択、資格・専門性など	将来の仕事や会社の種類（たとえば、どんな仕事があり、どんなことをするのかなど）
環境教育	環境教育:3R(リユース/リデュース/リサイクル)やゴミ問題、環境問題など	かんきょうもんだい（たとえば、電気をむだにしない、ごみをへらすなど）
多様性教育	多様性教育:異文化、国際化、障害者、高齢者など	外国人や体の不自由な人、おとしよりの生活の手助け

非教科教育に対する親の考え

学校で教えるべき非教科教育は「多様性教育」が上位。家庭では「食育」。

図表9 学校で教えるべき非教科教育(子の就学状況・父母別)

	小学1-3年生の母親	小学4-6年生の母親	中学生の母親	小学1-3年生の父親	小学4-6年生の父親	中学生の父親
n=	162	243	264	167	236	259
1位	多様性教育(50.6)	多様性教育(57.2)	職業教育(57.2)	多様性教育(49.7)	多様性教育(53.8)	多様性教育(56.4)
2位	職業教育(47.5)	環境教育(53.9)	多様性教育(53.0)	環境教育(47.9)	環境教育(50.8)	職業教育(52.5)
3位	環境教育(44.4)	職業教育(49.8)	環境教育(46.6)	職業教育(41.9)	職業教育(46.2)	環境教育(47.5)
4位	コミュニケーション教育(32.1)	コミュニケーション教育(45.3)	コミュニケーション教育(32.2)	コミュニケーション教育(33.5)	保健教育(39.8)	保健教育(42.9)
5位	保健教育(30.2)	保健教育(41.6)	保健教育(29.9)	情報教育(31.7)	コミュニケーション教育(35.2)	コミュニケーション教育(33.6)

注1:小学1年～中学生の子どもの持つ父親・母親の回答結果

注2:()内は%

図表10 家庭で教えるべき非教科教育(子の就学状況・父母別)

	小学1-3年生の母親	小学4-6年生の母親	中学生の母親	小学1-3年生の父親	小学4-6年生の父親	中学生の父親
n=	162	243	264	167	236	259
1位	食育(73.5)	食育(74.5)	食育(78.8)	食育(70.1)	食育(68.2)	食育(72.6)
2位	保健教育(60.5)	保健教育(46.9)	保健教育(56.1)	保健教育(58.1)	保健教育(44.5)	消費者教育(41.3)
3位	コミュニケーション教育(48.8)	消費者教育(41.2)	消費者教育(49.2)	コミュニケーション教育(46.1)	コミュニケーション教育(44.1)	保健教育(41.3)
4位	情報教育(46.3)	情報教育(41.2)	情報教育(47.3)	生活リスク管理教育(41.3)	情報教育(41.9)	コミュニケーション教育(45.2)
5位	消費者教育(38.3)	コミュニケーション教育(37.4)	コミュニケーション教育(47.3)	消費者教育(39.5)	消費者教育(41.5)	情報教育(44.0)

注1:小学1年～中学生の子どもの持つ父親・母親の回答結果

注2:()内は%

一方、父親と母親に対し、非教科教育について、学校で教えるべきもの、家庭で教えるべきものをたずねました。

学校で教えるべきものについて、それぞれどのような項目が上位にあげられているのかについて、就学状況別に父親と母親で比較を行いました(図表8)。

上位5位についてみると、中学生の母親で「職業教育」が最上位となった以外は、すべて「多様性教育」が最上位にあげられていました。父親においても母親においても、「職業教育」は学年があがるにつれて「学校で教えるべき」との回答率も高くなっています。

一方、家庭で教えるべきものについてみてみると、いずれの学年の父親・母親においても「食育」が最上位にあげられており、その割合も7～8割を占めるなど、家庭における実施意識が高いことがわかりました(図表9)。

特に中学生において「食育」を家庭で、と答えた親が多い点が興味深いところです。「保健教育」と「コミュニケーション教育」については、学校でも家庭でも上位5位内に入っており、学校と家庭の両者における期待が高いことがうかがえます。

《研究員のコメント》

調査からは、母親に比べて父親における子どもの学習環境や成績の把握状況が十分でないことや、子どもの学習状況に対する父親の満足度が低い点が浮き彫りになりました。母親に比べて子どもと直接接する時間が短くなりがちな父親は、ともすると子どもの教育に関して母親任せになりがちです。しかしそうした中で、本調査の分析結果からは、あえて父親が子どもの教育に積極的にかかわろうという意識を持つことで、子どもの学習環境が向上する可能性が示唆されています。こうした親の意識については、母親が専業主婦であるとか親に時間があるといった、物理的状況は直接影響していません。父親・母親共に、忙しくても子どもに積極的に向き合おうとする親の元では、子どもの学習環境が良好になり、子どもの学習意欲の向上に作用するようです。(参考：9月ニュースリリース「子どもの学力格差を生む親の意識格差」)

一方、子どもの社会的関心については、全体的に高いことが確認されました。そうした中、女子より男子でより社会的関心が高いという傾向があります。特に中学生の女子では社会的関心について「非常に興味がある」とする割合が低くなっており、新しいことに対する学習意欲についても「とてもべんきょうしたい」とする割合が非常に低くなっていました。中学生にもなると、他にいろいろと関心事項も出てくるせいか、社会のことなどに目を向ける余裕がなくなってくるようです。

また、子どもたちの非教科教育への関心としては、特に「職業教育」や「情報教育」、「金融経済教育」への関心が高いことがわかりました。子どもたちの間で関心度の高かった項目は、父親・母親が子どもたちに学習させるべきとした項目とは異なっており、親が子どもにとって必要であると考えている非教科教育項目と、子どもたちが学習してみたいと考えている項目とに乖離があることが浮き彫りになりました。

ゆとり教育の見直しなど、教育改革が進められる中、子どもに学ばせるべき科目として大人の視点からの議論が活発になされていますが、子ども自身が学んでみたいと思うことを積極的に取り入れていくことで、好奇心や探究心の芽を伸ばす教育もできるのではないのでしょうか。

(研究開発部 副主任研究員 宮木 由貴子)